

# みずいろ

ノーカット版

104号

## 日本PTA全国研究大会新潟大会参加しぽー

### 第2分科会 家庭教育

教育の原点は家庭から。わかってはいるけど中々実践できていない家庭教育。

おはようございます。おやすみなさい。ありがとう。ごめんなさい。今、会話している言葉の原点は、やはり家庭で家族に教わるのが始まりのように、すべての教育の始まりは家庭・家族にある。そんなことは、わかってる！ あたりまえ！ そんなことを言う声も聞こえてきそうですが、僕は、今回のこの講演で気付かせてもらいました。私たちの普段のしぐさ・言葉、子ども達は見て・感じて自分のものになっている。特に、道徳。これは、学校で教えてくれるより先に家庭で勉強している。今回の分科会に参加して感じたのは、子ども達より、大人である我々、親と呼ばれる世代にこそもう一度原点に戻ってモラル・道徳教育をうけるべきではないかと思いました。これから、様々な問題に直面していく子ども達を支え守っていく親であるために。と、考える機会をもらいました。

実践報告の一つに、新潟県で行われた『親守詩』の取り組みがありました。そもそも『親守詩』とは、「子守り唄は親が子どもを思う歌であるが、子どもが親を思う歌があってもいいのでは」との発想から始められたものだそうです。（詳しくは『親守詩』で検索してみてください）新潟でも「親守詩大会」を開催されて、親と子の協同作品である心あたたまる『親守詩』が多数寄せられたとのこと。子どもが親や家族への感謝の言葉をつづり、おくられた大人が返歌をつづるという作業の中で、きっと多くの笑顔や感動や心の通いがあったんだろうなと思うと、すばらしい取り組みだと感動しました。滋賀県でも是非やってみたい！

### 第4分科会

#### 地域連携・広報活動

基調講演：地域とともにある学校

講師：新谷さゆり（岐阜県白川村社会教育主事）

少子化が進む岐阜県白川村では、小学校の統廃合に伴い、小中の教育課程をひとまとめにした義務教育学校の設置を選択しました。校区が広くなり、学校や子ども達が住民から遠い存在になることは避けられません。このような状況ではますます人間関係は希薄になります。講演では、白川村でのコミュニティスクール（以降CS）の推進事例から、地域住民が当事者意識を見出していくプロセスをなぞりながら、協働とは何かを問いかけていました。研修で開示された方法の数々は白川村に適合したスモールステップです。関係者が話し合う場を設定し、話し合いが“熟議”となるよ

うキーパーソンが仕掛けていきます。話し合いの中で相手の課題を自分の領域からとらえなおすこと、関連性を見出す作業の共有が連帯感を生みます。そこから、連帯感が自発性を引き出すカギになると思いました。単純にCSという仕組みを模倣することが、学校や地域の課題解決につながるのではなく、自発的に考え行動する主体となることがgoal（目的）であり、そのためのmethod（方法）はコミュニティによって千差万別なのです。それぞれの団体における固有の活動を、新たな視点から組み立てること、そのような抽象的な枠組みに自分たちの現実をあてはめながら、私たちは“当事者”になっていかなければならないのだと思いました。

## 第5分科会 情報と人権

=ネット社会における大人の役割=

「「スマホ時代」を生きる子ども達のために、今、大人が知っておきたいこと」というテーマのもと、滋賀県でもスマホサミットのコーディネーターをしていただいている 竹内和雄准教授の基調講演、そして新潟市柏崎市のPTAおよび生徒の皆さんの実践発表が行われた。

柏崎市では、子ども達の取り組みとして「中学生メディア宣言」を2000人の中学生が意見を出し合い作成、宣言文をもとに学校独自のルール作りや啓発活動を継続している。また、大人たちの取り組みとして、柏崎市小中学校PTA連合会では「子どもとメディアを考える会」を組織し、子ども達の宣言を全面的に応援し、大人も「大人のケータイ・スマホ等に関する共同宣言」を発表した。スマホをはじめとするメディアの便利さを切り離せない現代の社会において、子どもに「ダメ」というだけでなく、「一緒に使い方を考える」時代が到来している。柏崎市にはまさに、親と子がともにメディアについて本音で語り合える場があり、その取り組みを継続している事が素晴らしいと感じた。

## 第7分科会

(テーマ) 国際理解

(研究課題) 多文化共生とコミュニケーション能力の育成

～国際社会でたくましく生き抜く子どもたちのために～

(基調講演) 長岡市国際交流センター長 羽賀友信氏

人はみな一人では生きられない。社会にはさまざまな文化を背景に生きてきた人々がかかわりあいながら生きている。国籍や人種、宗教はもとより、地域や家庭などでも異なった生活文化がある。全員が当事者にならないと多文化共生の社会の実現は難しい。相手を理解し、相手に理解してもらうためには、コミュニケーション力が必要。相手が自分に興味を持つように話す。自分のことをちゃんと伝える。ディベートも大切。そういう意味で英語は重要で英語を使うと世界は広がっていく。ファシリテーション能力も重要でデータに基づく主張や意見も大切。子どもが知らないことに出会ったとき、無関心になるのではなく好奇心をもち探究心を掻き立てるような育て方が大切で、家庭では子どもの好奇心を妨げず感じる心を育て、学校は理論的に考える力をつけることでコミュニケーション能力を身につけさせることにつながる。

(実践発表) うおぬま国際交流協会副会長 櫻井徳治氏

<省略:パネルディスカッションと関連が深いので>

(パネルディスカッション)

大学准教授のコーディネートの下、前述の魚沼国際交流協会副会長、国際結婚をして南魚沼に住む信田氏とその娘、南魚沼市教育長がパネリストとして参加。南魚沼の国際交流事業の紹介や活動に参加した経験などを踏まえた意見交流がなされた。日本初の大学院大学であり英語が標準語の「国際大

学」を擁する南魚沼市は新潟県の山間部の静かで自然豊かな日本の「いなか」そのものの地域であるが、外国人の国際交流事業に大変力を入れている。パネリストが口々に訴えるのは国際交流や国際理解は「むずかしいことではない」ということ。大切なのはとにかく恐れなくて話すこと。コミュニケーションをとること。片言でもいいから英語を話すこと。形にとらわれて怖気づかないこと。そうしたら自然に分かり合えてくる。困ることもあるが何とかなる。そんなメッセージをたくさん発信されていました。余談ですが、隣の越後湯沢町の移住促進PR動画(How to live in YUZAWA)が会場で流されていましたが、ナレーターは外国人(日本語)で本当に移住したくなるようなビデオでした。

## 全体会

大会記念講演は新潟県三条市出身の俳優 高橋克実さんのトークライブ。人を楽しませるのが大好きだった父親の影響を受けたことが俳優を目指したことに起因していたのだろうとのこと。家業の金物屋を継ぐことを避けて、東京に飛び出し半勤当状態での下積み時代。たまに実家に帰るがどうも居心地が悪く早々に戻る。母が持たせたのは郷土の味「みそにぎり」。肉とかいっぱい食べたかったのに、なんでみそにぎりばかりか。「でも今三条に帰って食べたいなあと思うのは、みそにぎりです。」下積みの苦労と言われるけど、「やってる本人は“苦しい”なんて思っていない。だって毎日“好きなこと”やってるんですから」と若き日々を語る。これからの夢は?との問いに、「どんな仕事をしたいか!?ではなく、誰と一緒に仕事をしたいか!?」との答え。いろんな先輩に教えてもらってきたこと、仲間から受けた刺激などが今の自分をつくっているから、と光る!?笑顔であつという間の楽しいお話でした。

新潟大会のスローガンは「教育は未来を拓く 新潟発 米百俵の精神! ~新潟に集い、語ろう 未来のひとづくり~。米百俵の精神とは、「150年前、戊辰戦争で新政府軍に敗れ、厳しい窮乏の中にあつた長岡藩が、救援のために届けられた米百俵を、将来の人づくりのための学校設立資金とした史実に由来」しているそうです。家庭教育・学校教育・地域連携・国際理解・情報と人権などの様々な講演や新潟の皆さんが重ねてこられた実践発表から学びました。滋賀県からは23名が参加。研修・移動・食事などを共にしながらの情報交流や大会スローガンの通りに子ども達の未来やPTA活動について語りに語った新潟大会となりました。

# 近畿ブロックPTA研究大会参加レポート

於 11月3日 和歌山県民文化会館

第2分科会は、近江八幡市立沖島小学校PTA元会長谷口さんによる事例発表「島の人たちのともに」でした。沖島小学校は、琵琶湖にあり日本で唯一、淡水湖にある人が住む島『沖島』にあります。児童は多いときで129名でしたが、今日現在は全校児童19名、島内に住んでいるのは2名で17名は毎朝船で通学しています。運動会や遠泳大会など学校行事にはPTAだけでなく島の人たちも一丸となり手助けをしてくれており、夏祭り、文化祭などの地域行事も大変賑やかで暖かいものになるそうです。そこでPTA、子ども達から島の人たちへ「ありがとう」を送りたいということで「ありがとう新聞」を年間5~6回発行し島内の回覧板や掲示板などで、感謝の気持ちを発信しておられます。

PTAというと堅く倦厭されがちな響きではありますが 沖島小学校PTAの方々は「できるように、できる範囲で、楽しんで参加していけるように」を基本に、これからも島の人たちに教えていただきながら、子ども達とともに学び成長していきたいという思い、とても素晴らしいと思いました。

**第6分科会**ではアドベンチャーワールド飼育部ふれあい課長 熊川智子さんによる 演題「未来につながるジャイアントパンダの子育て」の講演をお聞きしました。パンダの野生復帰プロジェクトというプロジェクトがあります。母親の愛情をしっかりと受けると受けないのとでは将来の積極性や繁殖能力に差が出るそうです。その事からアドベンチャーワールドでは赤ちゃんパンダを生まれてすぐ人の手で育てるのではなく、お母さんパンダに子育てをしてもらう方法をされているそうです。言葉の通じないお母さんパンダの仕草や目の動きを飼育員さんが感じ取りサポートをしていくそうです。またパンダは2頭産んでも1頭にしか母乳を与えないため2頭産まれた場合は1頭がお母さんの母乳を与えられている間、もう1頭は飼育員さんが預かりそれを交互に繰り返す入替飼育をされています。愛情、感じる眼差し、サポート、と私たちの子育てにも共通する部分が沢山あるなと感じました。